

〈恵慶百首〉浅香山春夏部試注

今井 明・黒木 香・竹田 正幸・田坂 憲二
南里 一郎・西原 一江・福田 智子

凡例

一、歌番号 注釈のはじめに、恵慶百首における通し番号を示し、あわせて（ ）付きで資経本恵慶集における歌番号（『私家集大成』中古Ⅰ所収「恵慶集」の歌番号と一致）を示す。

二、本文 底本は、冷泉家時雨亭叢書第六十七卷『資経本私家集三』（二〇〇三年十二月刊）所収、資経本恵慶集とする。漢字仮名の区別、仮名遣い、おどり字も底本のままとし、濁点も付さない。

三、校異 『恵慶集校本と研究』（熊本守雄氏、桜楓社、昭和五三年）に収められた以下の影印本を用い、語の異なるのほか、表記の違いも示す。

○書陵部一五〇・五五八本 略称（書古）

○越桐喜代子氏蔵（前田家旧蔵）本 略称（前）

四、語釈 見出し語は、底本の表記のまま掲げる。ただし、歴史的仮名遣いに改めたり、濁点を付したりする必要がある場合には、見出し語の次に（ ）を付けて示す。

五、別出 歌集の正式名称（『新編国歌大観』の目次に拠

る)、巻数、部立、歌番号、歌題、詞書、詠者名、歌、左注を、順に列挙する。

六、考察 考察中での和歌の引用形式は、原則として、「和歌本文」(歌集名・部立・歌番号・詠者名・詞書)とする。なお、『万葉集』の番号は、旧・新の順で表記する。

注釈

五一 (二四六)

【本文】

あさか山なにはつをかみしもにをきて
春

あらしたにをとせぬはるとおもひせはのとけく見ましよものはなく

【校異】 ○をきて―すへたり (前) ○おもひせは―思せは

(前) ○見まし―みまし (書古) (前)

【語釈】 ○あさか山なにはつ (あさか山なにはづ) 「あさか山」は、「安積香山影さへ見ゆる山の井の浅き心をわがおもはなくに」(万葉集・巻十六・三八〇七・三八一九)、また、「なにはづ」は、「なにはづにさくやこの花ふゆごもりいまははるべとさくやこのはな」(古今集・序)を指す。

「あさか山」歌は後に『古今集』仮名序にも載り、両歌は、「このふたうたはうたのちちははのやうにてぞ手ならふ人

のはじめにもしける」と並び称された。○かみしもにを

きて「あさか山」「なにはづ」の歌を、それぞれ一文字ずつ順番に、歌の最初と最後に用いて。〈好忠百首〉へ順百首にも同様の歌群がある。○たに(だに) 仮定の表

現の中に用いて、他の事物はともかく、ただそれだけと限定する意を表す。…さえ。…だけでも。○をとせぬ(お

とせぬ) 音がしない意と訪れない意とを掛けると解した。○のとけく(のどけく) 「のどけし」は静かで穏やかだ、うららかだ、心がゆったりとしている、気持ちのんびりしている。○まし 非現実的な事態についての推

量を表す。もし…だったら…だろう。○よも 東西南

北、前後左右、四方、周り、あちらこちら、至る所。

【通釈】

「浅香山」の歌と「難波津」の歌の文字を、それぞれ一首の初めと終わりに用いて

春

嵐さえ音のしない春だと思ふならば、ゆったりとした心で周りの花々を見るだろうに。春という季節に嵐はつきものであるから、のんびりと花を見ることができないことだ。

【別出】

『夫木和歌抄』巻第四、春部四、一二七七番

(花)

家集 春歌中

惠慶法師

嵐だに音せぬ春と思ひせばのどけく見まし四方の花

【考察】

花がいつ散るかということなど心配せず、穏やかな気持ちで春を過ごしたい。そういう気持ちを、「世中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし」（古今集・春上・五三・在原業平朝臣・なぎさの院にてさくらを見てよめる）と同様、反実仮想を用いて詠んだ歌である。

「あらし」は「嵐」と「荒し」、また「あらし」の意を掛けて用いられる語であり、「春の夜のわりなく更けてとまりしを嵐のかぜのあらしとやいはん」（元輔集・二三五）という用例も見えるが、惠慶の当該歌では、そういった掛詞は用いられていない。「あらし」と「はる」とを同時に詠み込んだ歌としては、惠慶以前には長歌以外管見に入らない。平安後期には「春さめにぬれてたづねん山ざくらくものかへしのあらしもぞふく」（金葉集・春・五五・堀河右大臣・後冷泉院御時皇后宮の歌合に桜を）がある。

「のどけし」を、春を迎える心情語として用いた例には、前掲『古今集』在原業平の歌がある。惠慶は業平歌を十分に意識しながらも、作歌の焦点を、「さくら」（よものはなばな）ではなく、「嵐」に当てて詠んでいるのである。また、「のどけくみまし」という表現は、〈惠慶百首〉中にも

他に、「ひととせのひたおもむきに春ならばのどけくみまし山のさくらを」（惠慶集・二二一・百首歌・春）というように見える。

「よも」は「山」や「海」を修飾する語として用いられる語であり、「花」を下接する例は惠慶歌以前には見られない。鎌倉期には「行く人の手ごとにかざす色みえてよもの花花今さきにけり」（建長八年百首歌合・四二七・具氏朝臣）がある。惠慶と交友関係にあった好忠には、「けぶりかによものやまべはかすみたりいづれのこのめもえのこるらん」（好忠集・一八・正月中）を始めとして「よもの…」という表現の歌が五首（一八・七〇・二七七・二九三・四二八）、安法にも二首（五四・五六）ある。

五二 （三四七）

【本文】

さ、かにのいやはねらるゝはるのよはうしろめたなきはなをみるかに

【校異】 ○よは一夜の（前） ○はな一花（前） ○みるかに一思に（前）

【語釈】 ○さ、かにの（ささがにの） 蜘蛛に掛かる枕詞として用いられる。蜘蛛、蜘蛛の巣、蜘蛛の糸の意から、同音の「雲」「曇る」や、「いと」「厭ふ」など「い」の音で

始まる語に掛かる。さらに、蜘蛛そのものを意味することもある。○いやはねらる、「い」は眠ること。「やは」は反語。「らるる(らる)」は可能。眠ることができようか、いやできない。○うしろめたなき「うしろめたなし」はある事態に対して感じる不安な気持ちを表わす。気がかりだ、心配だ、心もとない。○かに(がに) 上代東国語および平安時代の歌語。命令や禁止・希望などの表現を受けて、その理由や目的などを表す。…するばかりに。…するほどに。…するだろうから。

【通釈】

安心して寝ることができようか、いやそんなことはできない。春の夜は散ってしまうかもしれない気がかりな花を見るばかりに。

【別出】なし

【考察】

二四六番歌と同様、花が散ることを氣遣う春の心情を詠んだ歌である。

「ささがにの」は「い」から始まる語にかかる語であるが、「ささがにのい」とはるかなるくもるにもたえむなかとはおもひやはせし」(斎宮女御集・二四一・六女御に)や、「ささがにのいかにせよとかわがこひのたのもしげなきそらにしもふる」(元真集・二九一)のように、「いと」や

「いかに」に掛かることが一般的である。「寝」(い)に掛かる例は少なく、同時代では「ささがにのい」をだにやすくねぬ比は夢にも君にあひ見ぬがうさ」(順集・三八・思)が見られる程度である。

「いやはねらるる」という表現は、結句に置かれることが多い。「君こふる涙のこほる冬の夜は心とけたるいやはねらるる」(拾遺集・恋二・七二七・よみ人しらず)や、「手もふれで月日へにけるしらま弓おきふしよるはいやはねらるる」(貫之集・五八二・恋)がその例である。惠慶歌と同じく第二句に置いた例として、「うちはへていやはねらるる宮ぎののこはぎがしたば色にいでしより」(新古今集・恋五・一三六四・読人しらず・藤原惟成につかはしける)がある。

また、散りそうな花が氣掛かりで、春の夜の眠りが妨げられるという状況を詠んだ歌には、「いもやすくねられざりけり春の夜は花のちるのみ夢に見えつつ」(新古今集・春下・一〇六・凡河内躬恒)があり、惠慶歌と発想を同じくするものである。

「うしろめたなし」は「うしろめたし」と同義であるが、「をみなへしおほかるのべにけふしまれうしろめたくも思ひやるかな」(後拾遺集・秋上・三二二・橘則長)に関する『後拾遺抄註』の記事の中に、「ただの詞に、後ろめたなし

と云ふは、わろし。歌には、うしろめたしと詠む也」と評されている。平安期には、「うしろめたなし」を用いた歌が、「はるのうちはちらぬさくらとみてしかなさてもやかぜのうしろめたなき」(後拾遺集・春上・一〇八・右大弁通俊・承暦二年内裏歌合によめる)、「かさぎよりもりしたま水でもたゆくいはひしそでのうしろめたなき」(兼澄集・六二・ながたうがうへのきぬをかりて、あめゆゆしうふりしひきて、つとめてかへしたるに)、「よのほどもうしろめたなきはなのうへを思ひがほにてあかしつるかな」(和泉式部集・一八〇・三月ばかり、人のこむとてただにあかしたるつとめて、いひにやる)など十二首あり、〈恵慶百首〉にも、他に「いでたてばうしろめたなきあだ人よめぐりにすゑてはなたずもがな」(恵慶集・二九八・百首歌・ひと夜めぐり)と詠んでいる。「うしろめたし」ではなく、「うしろめたなき」を用いるのは、もちろん音数律の関係もあろうが、あるいは、恵慶の用語法の常として、あまり和歌に見られない語を、あえて用いたのかもしれない。

結句の「がに」であるが「さくら花ちりかひくもれおいらくのこむといふなる道まがふがに」(古今集・賀・三四九・在原業平朝臣・ほりかはのおほいまうちぎみの四十賀、九条の家にてしける時によめる)や「山ざとにしる人もがな郭公なきぬときかばつげにくるがに」(拾遺集・夏・九八・

つらゆき・延喜御時御屏風に)に用例があり、平安初期風の歌に仕立てるねらいが見てとれる。初句「さがに」の「がに」との重複を言語遊戯のひとつと見るのは、深読みに過ぎるであろうか。

五三 (二四八)

【本文】

かすみわけとをけに見えし山さくらそらにほひし色はいつらは

【校異】 ○とをけに―とをめに(前) ○見えし―みえし

(書古)(前) ○そらにほひし―そらに、ほひし(前)

○色―花(前)

【語釈】 ○とをけに見えし(とほげに見えし) 「げ」は、外見的な情況から判断して…と見える、いかにも…のさまである、の意。…そう。遠そうに見えた。 ○にほひし「にほふ」は、美しい色に輝く、照り輝く、の意。 ○いつらは(いづらは) 「いづら」は、指示代名詞。不定称。どこか。どちらか。散文では会話文に用いられる。

【通釈】

霞を分けて、遠そうに見えた山桜の、空に照り映えていた色は、いったいどこに行つたのだろう。

【別出】 なし

【考察】

遠くの山にかかった霞の間から、山桜の色が空に照り映えているように見えたが、今はその色がない。この歌は、山の霞を桜と見誤った歌である。

初句「かすみわけ」は、同じ惠慶の歌に、「霞わけわかなつみにやとまらましかすがののべもちかづきにけり」(惠慶集・三五・正月ついたちごろ、人人もろともに、はつせにまゐるみちに、春日野を見やりて)があり、またほぼ同時代に、「霞わけいまかり帰る物ならば秋くるまではこひやわたらん」(拾遺集・物名・四一五・よみ人しらず・まがり)、「春の日に霞わけつとぶ雁の見えみみえずみ雲がくれ行く」(寛平御時后宮歌合・六)、「霞わけ雁かへるなりをやまだのなはしろ水にかけをうつして」(嘉言集・一四・かすみのあひだに返るかり)、「かすみわけとふべきものをうぐひすのなくねはるけきをちのやまざと」(大斎院御集・六八)といった用例が見える。雁や鶯などの鳥とともに詠まれることが多いようだが、惠慶歌には二首とも鳥は出てこない。

また「とほげ(に)」の用例は、ほぼ同時代の歌として『相模集』歌二首、「あまのがはわたるあふせはほどなくてへだてつるきしのとほげなるかな」(相模集・四五七・七月)、「しもがれむほどとほげにもみゆるかないまもえいつ

るにはのわかくき」(相模集・五三二・はる)を挙げるにとどまる。一方、前田家本文「とをめ(とほめ)」ならば、惠慶にも他に、「とほめにはなほぞわかれぬ山ざぐらいぎやどかりてゆきてをしまむ」(惠慶集・一七七・はるかに山のさくらをみる)、「かすみたつみねやいづれぞたづねみむはなのとほめをまぎらはすかな」(惠慶集・三〇〇・たつみ)の例があり、いずれも山桜を遠くに見る点、当該歌に共通する。また同時代の歌も、「はるたてばさとにたなびくしらくもはさける桜のとほめなりけり」(古今六帖・四一七・七・さくら)、「をぐら山おりる雲はたに河のかはべのたづのとほめなりけり」(夫木抄・卷二十七・雑九・一二五九〇・花山院御製・大井河行幸に霜のつる地にたてるを雲のおるるかとうたがひ云云)、「おほひえやをひえのやまも秋くればとほめもみえずきりのまがきに」(好忠集・二一五・七月をはり)、「さはべはむこまのとほめはおしなべてあしのはなけと見えわたるかな」(大式高遠集・三二三・あしのなかに、こま、ものはむところ)などがあり、用例数から見れば、「とほげ」よりも「とほめ」の方が優勢である。なお、後世の物語に、「春をへて霞はれせぬ山ざぐらいかなる折かとほめにもみむ」(風葉集・恋五・一〇六二)、「白妙に降り積む雪と見えつるは梅咲く山のとほめなりけり」(浜松中納言物語・八・中納言)といった、山の桜や梅を

「とほめ」に見るといふ歌が見える点、注意しておきたい。

第四句「そらには(ひし)」の用例は、惠慶と同時代にはきわめて少ない。管見によれば、「おぼつかなあだし野みれば花もなし空に匂ふといふやなにぞも」(順集・一四〇)という歌合の判詞の歌が指摘されるのみである。

また、結句「:はいづらは」の例も、「大原やせかひの水をむすびつつあくやと問ひし人はいづらは」(伊勢物語・補二段へ阿波国文庫本・二二二)が、惠慶と同時代以前の例として、今のところ唯一挙げられるものであろう。そもそも「いづらは」といふ語句は、「むつごとくもまだつきなくにあけぬめりいづらは秋のながしてふよは」(古今集・誹諧歌・一〇一五・凡河内みつね・題しらず)、「ともかくもいふ事のは見えぬかないづらはつゆのかかり所は」(後撰集・恋二・六〇九・本院右京・くにもちがおとせざりければつかはしける)、「よの中のなり行くさまもおなじこといづらはそこらたちしかすみは」(好忠集・一〇二・四月はじめ)、「かぜぬるみむめのはつはなさきぬればいづらは宿のうぐひすのこゑ」(高遠集・一六五・南枝暖待鶯)、「こまごまにあふとはきけどなきなをばいづらはけふも人のつみける」(和泉式部集・二五一・正月七日、おやのかうじなりしほどに、わかなやるとて)、「まどろまばうき世ゆめともみるべきにいづらはさらにねられざりけり」(和泉式部集・四

四一・こころにもあらずあやしき事いできて、れいすむ所もさりてなげくを、おやもいみじうなげくと聞きていひやる、かみのもじはよのふることなり)といったように、第四句に置かれることが多い。なお、『伊勢物語』には他に、「紅にほふはいづら白雪の枝もとををに降るかとも見ゆ」(伊勢物語・第一八段・三〇・女)、「いにしへのにはひはいづら桜花こけるからともなりにけるかな」(伊勢物語・第六二段・一一一・男)という歌がある。惠慶に先行する「にほひ(にほふ)」と「:はいづら」との組み合わせの例が、二首まとまって存する点に留意しておきたい。

五四 (二四九)

【本文】

やまふきのにほふさかりになりぬれはゐてへいてたつわれはかつく

【校異】 ○やまふき—山ふき(前) ○われ—我(前)

【語釈】 ○ゐてへいてたつ(ゐでへいでたつ) 「ゐで」は井手。山城国の歌枕。現在の京都府綴喜郡井手町。山吹・かわずの名所である。「ゐで(井手)」と「いで(出)」で、「で」が韻を踏むか。「ゐでへ」の「へ」は、移動性の動作の目標を示す。「遠くへ」の気持ちを含む。 ○かつく(かつがつ) とりあえず。急いで。

【通釈】

山吹の花が美しく照り映えて咲く盛りになったので、私は取るものも取りあえず、山吹の名所、井手へ出かける。

【別出】なし

【考察】

山吹が花盛りの頃には、遠く井手へと、急いで出かける。もちろんそれは、「かはづなくるでの山吹ちりにけり花のさかりにあはましものを」（古今集・春下・一二五・よみ人しらず・題しらず）と同じ轍を踏まないためである。

恵慶には、あたかも当該歌の続きのような、「山吹の花のさかりにゐでにきてこのさと人になりぬべきかな」（拾遺集・春・六九・恵慶法師・ゐでといふ所に、山吹の花のおもしろくさきたるを見て）という歌もある。井手の山吹の盛りの情景は、恵慶と交友のある中務も、「やまぶきのはなのさかりはかはづなくるでにやはるのたちとまるらん」（中務集・七五・坊城の右のおほいとこの五十賀中宮したまふ、村上の先帝のめしたる）と詠んでいる。

「やまぶき」が「にほふ」という表現は、恵慶以前の用例として、「ながれ行くかはづ鳴くなり足曳の山ぶきの花にほふべらなり」（貫之集・七七・延喜十七年八月宣旨によりて）が見出される。

また、「にほふさかり」という語句は、「山ざとにちりな

ましかば桜花にほふさかりもしられざらまし」（後撰集・春・中・六八・衛門のみやすん所の家うつまさに侍りけるに、この花おもしろかなりとてをりにつかはしたりければ、きこえたりける）、「女郎花にほふさかりを見る時ぞわがおいらくはくやしかりける」（後撰集・秋中・三四七・よみ人しらず・前栽にをみなへし侍りける所にて）、「卯花のにほふさかりは月きよみいねずきけとやなくほととぎす」（伊勢集・四四三）、「むめのはなにはほふさかりのゆふぐれはやみにもいろぞまがはざりける」（蔵人所歌合・天曆十一年・七）というように、桜・女郎花・卯の花、梅など、山吹に限らずさまざまな花について用いられる。

「やまぶきの…なりぬれば」という句をもつ歌は、恵慶の当該歌が初出であろう。後には、「山ぶきのはなさくさとなりぬればここにもゐでとおもほゆるかな」（山家集・一六六・山ぶき）、「やまぶきのはなの盛になりぬればゐでのわたりにゆかぬ日ぞなき」（金槐集・一一四・河辺款冬）、「やまぶきの句ふさかりになりぬれば人やは過ぎぬ志賀のはなぞの」（通親亭影供歌合・建仁元年三月・六六・寂蓮）、「山吹のはなのさかりになりぬれば折しりがほにかはづなくなり」（題林愚抄・一二六八・季経・蛙）、「山ぶきのはなさくころになりぬればゐでこのそ思ひやらるれ」（伏見院御集・六二一・春里）といった歌が見える。これらの歌

は、程度の差こそあれ、当該歌の影響下に詠まれたと見てよいだろう。特に寂蓮の歌は、上句が当該歌とまったく一致する。

「ゐでへいでたつ」の他例は見えないが、「ゐでへ…」の箇所に着目すれば、「やまぶきのはななきさとにすまばこそふりはへとほきゐでへとおもはめ」（忠見集・六六・麗景殿の歌合に、ひだりがたにて、やまぶき）が、恵慶と同時代の歌として指摘される。

結句「われはかつがつ」は、他例を見ないが、結句が「かつがつ」で終わる歌ならば、「やどちかくさくらほうゑじこころうしきくとはすれどちりぬかつがつ」（好忠集・順百首・五三七・恋十）という用例がある。ここにも、〈恵慶百首〉歌と〈順百首〉歌との表現上の類似性が見られよう。

五五 (二五〇)

【本文】

まつのねにかゝるふちなみ水なれやいさふねこかんまつこゝろみに

【校異】○水―うら（前）○こかん―こかむ（前）

○まつこゝろみに―^{まつこゝろみに}なはしろみつにへ七字ミセケチ（前）

【語釈】○ふちなみ（ふぢなみ） 藤の花房が、風にゆられてうねり靡く形を波に見立てていう語。転じて、藤または藤の花そのものを指す。○なれや「や」は詠嘆。…だなあ。…であることよ。○まつ（まづ）ともあれ。ひとまず。ちよつと。

【通釈】

松の根にかかる藤の花の波は、まるで水のようなあ。さあ船を漕いでみよう、ともあれ試みに。

【別出】なし

【考察】

初句・第二句の「松の根にかかる藤波」と同一の句を持つ歌は管見に入らないが、松と藤を詠む歌は、『古今集』以来、珍しくはない。「うつろはぬ色にるともなきものを松がえにのみかかる藤波」（貫之集・一一五・松にかかれ藤）、「みづのおもにかぜたかからしきのうへの松のすゑまでかかるふちなみ」（能宣集・一一〇・おなじころ、いけのほとりの藤の花のさきかかりてはべるを）などが、その例である。

右の能宣歌のように、水辺の藤波を詠むことは一般的であったし、「こぐふねにけさよりかけしふぢなみはよるさへみゆるものにぎりける」（重之集・一〇二）や、「ふぢのはなさけるわたりをこぐ船のよそにてなみはおもひかけな

む」(元真集・六)のように、舟に乗って岸の藤を見るという歌もある。また、「藤波」の「波」が、水を連想させるところから、「こむらさきにはへるふぢのはなみればみづなきそらになみぞたちける」(能宣集・二〇五・あるところにて、にはのまへなるふぢのはなをよみはべりし)といった歌もある。恵慶の当該歌は、これらの着想から一歩進んで、「藤波」を「水」そのものに見立て、水なのだから試しに船を漕ぎ出そう、と詠む。なお、前田家旧蔵本のように、第三句の「水」を「浦」とする異文に依れば、第四句を導きやすくなる。

『歌ことば歌枕大辞典』藤の項(田坂順子氏)によると、『古今集』以降、水辺の藤の花にもまして詠まれるようになるのが「松にかかれる藤波」であるという。そして、この景を詠んだ第一人者は紀貫之であり、それらの歌はすべて屏風歌であるらしい。恵慶の当該歌は、このような屏風歌を背景にして、その図柄に自ら分け入ろうとする新たな趣向を加えた歌といえよう。

五六 (二五二)

【本文】

夏

かをとめてわれはむつふるあやめくさよそめにこまのみる

かあやしき

【校異】○われ―我(前) ○あやめくさ―あやめ草(前)

【語釈】○かをとめて 「とむ」は求める。たずねる。香を求めて。 ○われは この「は」は対比用法で、「私は親しむあやめくさ(だが、駒は……)」と解釈する。対比用法の「は」の例としては、「人はいさ心もしらずふるさとは花ぞ昔のかににほひける」(古今集・春上・四二・つらゆき)がある。 ○むつふる(むつふる) 「むつぶ」は、仲よくする、親しくする、むつまじくする。ここは「親しむ」という程度に解しておくべきか。形容詞「むつまじ」とは、「むつ」が同根。『類聚名義抄』では「睦・親・昵・党・懷」を「ムツマシ」と訓ずる。語法としては、ここでは連体形で下の「あやめくさ」に係るので「われはむつふる」では切れない。 ○あやめくさ(あやめくさ) 菖蒲のこと。香の強い草で、邪気を払うとされた。 ○よそめ よそ事として見る。傍観。 ○こま 「馬」をいう歌語。小林隆「コマ(駒)の位相―方言研究から国語史へ―」(国語学・第百九十六集、平成十一年三月)参照。 ○あやしき 自分の考えとはちがう、気が知れない、といったいぶかしい気持ちをいう。

【通釈】

香を求めて、私は親しみ好むあやめくさだが、その香を嫌

うのか、馬がこちらをよそ目に見るのが、どうも理解できない感じがするよ。

【別出】なし

【考察】

駒があやめぐさを「すさめず」というのは、『拾遺集』卷第十二、恋二、七六八番にも採られた「おふれどもこまもすさめぬあやめぐさかりにも人の来ぬがわびしき」（躬恒集・二七四）が初出であろう。その後も「こまなべてすさめぬさはのあやめぐさ今日にあはずはなほやからまし」（元真集・九・なかの夏、五月五日）や、「こまだにもすさめずといふあやめ草かかるはきみがすさびとぞきく」（義孝集・三八・藤侍従、五月五日、まろなるしやうぶやるとて）、「その駒もすさめぬ草と名にたてる汀のあやめ今日や引きつる」（源氏物語・虫・二七六・花散里）に見出すことができる。

恵慶自身にも、「わがこまのつねはすさめぬあやめ草ひきならべてはけふこそは見れ」（恵慶集・八）があり、さらに、「かをとめてとふ人もありやあやめぐさあやしくこまのすさめざりける」（恵慶集・七四・五月五日、めづらしき所にまかりて）の詠がある。『後拾遺集』第三、夏、二一〇番に採られたこの歌と当該歌の内容は共通しており、「人」「われ」が「あやめぐさ」の香を好ましいものと捉え

ているのに対し、「こま」は嫌っている。また、「あやめぐさ」と「あやし」の組み合わせも同じで、恵慶が、「あや」の同音反復を好んで用いているようにも見える。『古今集』恋部冒頭の「郭公なくやき月のあやめぐさあやめもしらぬこひもするかな」（古今集・恋一・四六九）が想起されよう。「香をとめて」が初句にくる歌を検すると、梅を詠んだ「かをとめてたれをらざらむむめのはなあやなしかすみたちなくしそ」（躬恒集・三〇三）、「かをとめてひとともにこぬむめのはなまちくらしつつひとりをるかな」（忠見集・六三・むめ）や、橘を詠んだ「かをとめてこひしもしるくたち花のもとにはひはかはらざりけり」（高光集・四〇）、菊を詠んだ「かをとめてをるべきものをきくのはなおりくるなみやおりつくすらん」（高遠集・一七七・菊綻暮流芳）を見出すことができる。いずれも香りを強く意識させる花について詠んでいるが、あやめぐさの香氣について詠んだのは、恵慶が初めてであろう。

第二句の「むつぶる」であるが、用例が希少で、「風ふけばよどをむつぶる水とりのうきねをのみやわがねわたらん」（古今六帖・一四七三・みづとり）の他は、「…おもひのこと うらがれず しらぬおきなに なりゆけば むつぶるたれも なきままに 人をよはひの くさもかれ わがにしきぎも くちはてて …」（経信集・一七六・初冬述

懷、永保二年十月日、刑部卿政長八条全」という長歌以外、管見に入らない。他の活用形を含めても、西行の「雲かかるやまみばわれもおもひいでに花ゆゑなれしむつび忘れず」(山家集・雑・九九〇)、「めぐりあはで雲のよそにはなりぬとも月になれ行くむつび忘るな」(西行法師家集・雑・四四九)まで、和歌の用例は見いだせないようである。『古今六帖』の例は、活用形も当該歌と一致しており、恵慶の用語の出自を考える上で重要である。

結句の「…あやしき」であるが、このように結句で形容詞を名詞化して止める歌自体は、枚挙にいとまがない。しかし、「…あやしき」に限定して検すると、「よの人のならねばあまにあらねどもしほたるとのみいふがあやしき」(忠岑集・一三五・これひら)、「うゑて見る君だにしらぬ花の名を我しもつけん事のあやしき」(拾遺集・物名・三六一・よみ人しらず・しもつけ)の他、「なにごとともなるともなしにうりつらの名にのみたたむことのあやしき」(義孝集・五六・四日のよ、かへしあり)、「おくやまのほそたにがはいはまよりさすがにたえぬつまのあやしき」(恵慶集・二八〇)、「おもひやるころづかひはいとなきをゆめに見えずときくがあやしき」(好忠集・四四四)というように、恵慶自身とその同時代に用例がある。また、物語中の和歌にも、『宇津保物語』に二首(一一五番、四一六番)の用例

が拾えるが、平安時代の用例はこれですべてである。

五七 (三五二)

【本文】

けちかくてきかまほしきを郭公まつはつこゑはいつくにかなく

【校異】 ○郭公―ほと、きす (書古) (前)

【語釈】 ○けちかくて (けぢかくて) 「けぢかし」は、身近だ、親しいの意。 ○郭公 ほととぎすは『万葉集』以来多くの歌に詠まれる。「さ月こばなきもふりなむほととぎすまだしきほどのこゑをきかばや」(伊勢集・三七四)、「ほととぎす声ききしよりあやめぐさかぎすさ月としりにしものを」(貫之集・二二八)など、初夏五月になると山から里に下りてきて鳴くと考えられていた。 ○まつ 「まつ」(待つ) か「まづ」(先づ) か。両方の意が懸かるのだから、『新編国歌大観』では「まづ」と表記する。下の「はつこゑ」に初めの意が含まれるので、ここでは「まつ」を「まづ」(はじめに) として意味を重複させず、「まつ」(待つ) とする。 ○はつこゑ その季節になって初めて聞く鳥などの鳴き声。ほととぎすは五月から鳴くとされたので、夏五月のほととぎすの第一声。「はつこゑのきかまほしさに郭公夜深くめをもさましつるかな」(拾遺集・九

六・よみ人しらず・題しらず、「こよひよりいはたねられじ
ほととぎすまづはつこゑのきかまほしきに」(能宣集・三
六・五月一日ほととぎすまつこころの歌、人人のよみはべ
りしに)など、平安時代の人々は、ほととぎすの初声を聞
くことを楽しみにしていた。

【通釈】

間近で聞きたいのに、待ちわびているその最初の鳴き声
を、ほととぎすは一体どこで上げるのだろうか。

【別出】なし

【考察】

平安時代の貴族たちは、清少納言が『枕草子』第三八段
「鳥は」に「五月雨の短き夜に寢覺をして、いかで人より
さきに聞かむと待たれて、夜深くうちいでたる声の、らう
らうじう愛敬づきたる、いみじう心あくがれ、せむかたな
し」と記すように、ほととぎすの声を一刻も早く聞きたい
と考えていた。恵慶の当該歌もほととぎすの初鳴きを待ち
わびる詠。「今ははやみ山をいでて郭公けぢかきこゑを我
にきかせよ」(後撰集・恋五・九五〇・小野宮実頼・大輔に
つかはしける)は恋の歌だが、恋しい相手だけではなくほ
ととぎすの声も間近に聞きたいと思っていた。それは当該
歌の初句・第二句「けぢかくてきかまほしき」にも表現さ
れている。

「ほととぎす」「まつ」(あるいは「まづ」)「はつこゑ
(はつなき)」を詠む歌には、「山がつと人はいへどもほと
とぎすまづはつこゑはわれのみぞきく」(拾遺抄・夏・六三・
是則・女四親王の屏風)、「はつこゑを我にきかせよほとと
ぎすまづはつなきをわれにきかせよ」(躬恒集・四四五)、
「み山いづるまつはつこゑはほととぎすわがやどちかくう
ちもなかなむ」(兼盛集・一六〇・四月ほととぎすきく家)、
「ことしだにまづはつこゑをほととぎすよにはふるさでわ
れにきかせよ」(詞花集・夏・五七・花山院・題不知)など
がある。

この恵慶の歌は、目新しいことばや句を用いずに詠まれ
ている。解釈はしやすいが、特別なおもしろさはあまり感
じられない。

五八 (二五三)

【本文】

五月まつはなたちはなのかをかきてむかしの人はきてもこ
ひすや

【校異】 ○五月―き月(前) ○はなたちはな―花たちはな

(前) ○きてもこひすや―きつ、とはすや(前)

【語釈】 ○五月まつはなたちはな(五月まつはなたちは
なの) 「さつきまつ花橘のかをかげば昔の人の袖のかぞす

る」(古今集・夏・一三九・よみ人しらず・題しらず)とまったく同じ。第三・四句も近似する(福田智子・南里一郎「恵慶の歌と『古今集』——平安中期一歌人の歌作り——」『純真紀要』第四十一号、平成十二年十二月参照)。「はなたちばな」は橘の花。橘に関する歌は『古今集』以降は初夏に開花する「花橘の香」に限定され、実や葉が詠まれることはほとんどなくなってしまう(『歌ことば歌枕大辞典』吉海直人氏)という。○かをかきて(かをかぎて)本歌の『古今集』一三九番歌では「かげば」と、確定条件を示し、香りによって恋人のことを思い出す。恵慶歌は「かぎて」とし、花橘の香りをかいだ恋人が自分を思い出すことを期待する。○むかしの人 昔関わりを持った人、恋人。○きても「ても」は仮定の逆接。来たとしても。前田本「きつつ」の「つつ」は逆接の接続助詞。○こひすや(こひずや)「こひすや」は肯定「恋ひすや」と否定「恋ひずや」とが考えられるが、恋人はもう自分のことを恋しく思ってはくれないという意であろうから、「恋ひずや」とあるべきだろう。「や」は詠嘆の終助詞。

【通釈】

五月の訪れを待つて咲く花橘の芳しい香りをかいだ、かつて関わりを持ったあの人がここにやって来たとしても、私のことを恋しくは思ってくれないだろうなあ。

【別出】なし

【考察】

「さつきまつ花橘のかをかげば昔の人の袖のかぞする」(古今集・夏・一三九・よみ人しらず・題しらず)を本歌とすることは言うまでもない。「いにしへをおもひぞいづるさつきまつ花たちばなのかをりわすれで」(花山院歌合・五・橘／左・かいしう)、「やどちかくはなたちばなはほりうゑむかしをこふるつまとなりけり」(金葉集 三奏本・夏・一二六・花山院・題不知)、「とるもうしむかしの人のかににたる花橘になるやとおもへば」(和泉式部続集・一一〇・二月ばかりに、まへなるたちばなを人のこひたるに、ただひとつやるとて)など、『古今集』一三九番歌を本歌とする歌はいろいろあるが、恵慶の歌のように一首のほとんどをそのまま取って作られた歌はない。好忠に「香をかげばむかしの人のこひしきにはなたちばなに袖をしめつる」(好忠集・一一一)の詠があり、恵慶歌同様、初句・第二句を『古今集』から取る。

恵慶歌は初句・第二句「五月まつはなたちばな」は『古今集』とまったく同じである。第三・四句も「かをかぐ」「むかしの人」とほぼ『古今集』歌そのまま、助詞の「ば」を「て」に、「の」を「は」に変えて詠み、第五句になつてようやく別の言葉を用いている。

第五句は、前田家本では「きつつとはすや」。あの人は来たものの自分のもとを訪問してくれないという解釈ができるが、相手がどこに来るのかがわかりにくい。底本「きてもこひすや」（来ても恋ひずや）なら、私のもとをあの人が訪れたとしてももう昔のように恋しく思ってはくれないだろう、の意となり、訪れる先は自分のところであることははっきりする。この第五句の「き」には、古今歌の「袖」との関わりから、「着」を響かせているか。

自らが花橘の香をかぐという『古今集』歌とは異なり、恵慶は昔の人が戻ってきて、花橘の香をかぐと詠む。ほぼ全歌にわたって『古今集』歌そのままであるが、花橘の香りをかいで恋人を思い出している『古今集』歌に対して、恵慶の歌では花橘の匂いをかいでも恋人は自分を思い出してはくれないだろう、と全く反対の内容とした面白さがある。

五九 (二五四)

【本文】

へかたけに見ゆる世なれとなつひきのかたいとにてもたえぬわかせこ

【校異】○見ゆる―みゆる（書古）（前）○なつひきの―夏ひきの（前）

【語釈】○へかたけ（へがたげ） 経難げ、時を経るのが困難。「へ」には同音の「綜（機織Ⅱの縦糸を引き延ばして掛けるもの）」が、「かたげ」には「たけ（丈）」が掛けられている。○なつひき（なつびき） 夏に、糸を繰り引くこと。またその繰り引いた糸。夏蚕（なつご）の糸。あるいは夏にとった麻の糸をつむぐこともいう。「夏びきのてびきのいとをくりかへし事しげくともたえむと思ふな」（古今集・恋四・七〇三・よみ人しらず）、「たまのををいかでなしけん夏びきのいとにしあらねばよらじとぞ思ふ」（古今六帖・第五・三三〇二・貫之）、「なつびきのしらいとのでぐりまだしきによるはみじかくなりけるかな」（好忠集・一〇二）などのように用いられる。「糸」とのかかわりから、「繕る」「絶ゆ」「織る」「乱る」などの語とともに詠まれることが多い。○かたいと 片糸。二本の糸を繕り合わせて一本の糸にするとき、繕り合わせる前の片一方の糸を言う。片繕り糸。頼りない物の比喻として用いられる。「かたいとをこなたかなたによりかけてあはずはなにをたまのをにせん」（古今集・恋一・四八三・よみ人しらず）等の用例がある。○わかせこ（わがせこ）「せこ（背子）」は、広く男性を親しんで言う語。主として女性が用いる。ここでは、女性の立場で、夫あるいは恋人を指して言ったのであろう。『万葉集』に多くの用例が見られる。

「かせ（総）」が響かせてあるか。

【通釈】

生きているのが難しく見えるこの世であるが、夏引きの片糸のように頼りない状況であっても、絶えることのないわがせこだ。

【別出】なし

【考察】

「へかたけにみゆる世なれと」の初二句は、人口に膾炙した藤原高光の「かくばかりへがたく見ゆる世の中にうらやましくもすめる月かな」（拾遺集・雜上・四三五）を踏まえたものか。高光歌は、『拾遺抄』五〇〇番、『続拾遺集』五〇四番、『和漢朗詠集』七六五番などに採録されるほか、『栄花物語』、『宝物集』、『撰集抄』など多数の文献に見られる。高光歌から直接影響を受けた和歌は、慈円の「へがたきはうき世とこそは思ひしをさてもことしはいくとせの春」（拾玉集・四五七九）や、兼好の「うきながらあればすぎゆく世中をへがたきものとなにおもひけむ」（兼好法師集・二二）など他にも多い。また、恵慶の和歌のように、「へがた（し）」「世（の中）」と「糸」を組み合わせたものには、宗尊親王の「くるしくも賤がしげ糸手にかけてへがたきよとは今ぞしりぬる」（中書王御詠・二八四）がある。

語句の連想として、「なつひきの」「かたいと」「たえぬ」

のつながりはごく自然なものであるが、「わがせこ」の結句に収斂していくのは、「わがせこがくべきよひなりささがにのくものふるまひかねてしるしも」（古今集・墨滅歌・一一一〇・そとほりひめ）、「わがせこがしるきよひとまさぎにのいとをたのまん心ちこそせね」（朝光集・六三）などに代表される、「ささがに」「くも」「いと」と「わがせこ」の組み合わせが背景にあらう。ただし、切れやすい片糸と「たえぬわがせこ」の意味内容の上のつながりはやや不分明。作者が女性の立場に立って「わがせこ」のことを詠んでいるのであれば、「かたいと」の状況と、この和歌の主体（女性）がどう関わるのか分かりにくい。ただ、

【語釈】でも述べたように、「綜（へ）」「丈（たけ）」「なつひきのかたいと」「たえぬ」という縁から「総（かせ）」を含む「わがせこ」という語句へのつながりは自然である。

「わがせこ」の用例は、すでに【語釈】で述べたように、『万葉集』に多く見られる。恵慶自身も、当該歌の他に、「るいしつついぎ秋ののにわがせこがはなみる道をわれおくらすな」（恵慶集・二六七）という歌を詠んでいる。恵慶と同時代歌人の作としては、『好忠集』に六首（二四四・一六五・二二二・二三四・二四六・二七二番）集中して存する点に、留意しておきたい。

六〇 (二五五)

【本文】

みやまへのしかのたちとをたつぬれは見せたるものはなつをちのつの

【校異】 ○みやまへ—み山へ(前) ○見せたるものは—みせたるものは(書古) みたる、ものか(前) ○なつをちのつの—なつおちのつの(前)

【語釈】 ○みやまへ(みやまべ) 「みやま」は深山で、奥深い山や、山の奥深いところ。「へ」は辺で、周辺・ほとりの意味。『日本国語大辞典』は恵慶の当該歌を初例に上げる。「みやま」と「へ」とは、一見なじまない組み合わせであるが、「みやまべのさと(深山辺の里)」の用例は、和歌でも百首以上を数えることができる。類語の「深山の里」という言い方も、早く「霰ふるみ山のさとのわびしきはきてたはやすくとふ人ぞなき」(後撰集・冬・四六八・よみ人しらず)があるから、これらの「深山の里」「深山辺の里」から「里」をはずして用いたものか。「深山辺の里」は、曾祢好忠に「雪きえばあぐのわかなもつむべきをはるさへはれぬみやまべのさと」(好忠集・七・春のはじめ)、

「みやこにもみちふみまよふ雪なればとふ人あらしみやまべのさと」(好忠集・三三七・十二月中)があり、平安後期から作例は急増する。○たちと(たちど) 立所、立処。

立っている所。立っている足許。また、住んでいる場所。

「さ月山このしたやみにともすひは鹿のたちどのしるべなりけり」(貫之集・九)、「たかさこのをのへのはぎを折りつれば鹿のたちどやうすくなるらむ」(元真集・六二)、「をぐら山しかのたちどのみゆるかな峰のもみぢやちりまさるらん」(高遠集・三六二)のように、「鹿のたちど」の形で使われることが多い。○見せたるものは 意味が分かりにくい。ここでは前田家本の「みたる、ものか」の本文を採用し、鹿の角が乱れ落ちている意味と考えた。○なつをちのつの 夏落ちの角。夏に抜け替わって落ちる鹿の角、の意。ただし和歌の用例はない。夏の鹿は和歌にも多少詠まれ、『夫木抄』巻九、夏三では「夏鹿」を項目として掲げ、三七二八番以下八首を掲げるが、角を詠み込んだものはない。

【通釈】

奥山のほとりの鹿の住まいを尋ねてみると、夏落ちの角が乱れ落ちている。

【別出】なし

【考察】

恵慶は特に新奇な歌語を創作するというわけではないが、従来用いられている歌語や歌句を少しずらして、あるいは許容範囲を拡大して使用することがある。語釈で述べ

たように、「みやまの里」「みやまべの里」から「里」を切り離して「みやまべ」という、より汎用性のある語にしよ
うとしたのではないか。恵慶は類似語の「みやまほとり」
という語も、「もみぢゆるゑみやまほとりにやどりしてよる
のあらしにしづこころなし」（恵慶集・一一八）というよう
に用いており、『日本国語大辞典』の「みやまほとり」の
項目では、やはり『恵慶集』の一一八番歌を例としてあげ
る。一体、恵慶の和歌は総歌数の割に、『日本国語大辞典』
の用例に用いられることが多いようで、それは、歌に用い
る語の幅を広げていこうという、恵慶の作歌態度にもよる
のではなからうか。

「たちど」にも、同様のことが言えるようである。植物
の藤袴などとの組み合わせを除くと、語釈の用例にあげた
ように、動物の場合はほとんどが「鹿のたちど」という使
われ方をしていたこの言葉を、恵慶は、「よどがはのすき
てあなたにある水のエこそまだみねこまのたちども」（恵
慶集・二九五）というように、「駒」と組み合わせ用いて
いる。この組み合わせは、後代の歌人にも継承され、定
頼・俊頼なども用いている。

附記 本試注は、筑紫平安文学会で行っている『恵慶法師
集』輪読の成果の一部である。既発表分については、以下

を参照されたい。

「〈恵慶百首〉春部試注」（『純真紀要』第44号、二〇〇四年三月）

「〈恵慶百首〉夏部試注」（『純真紀要』第45号、二〇〇四年十二月）

「〈恵慶百首〉秋部試注」（『活水論文集』第48集、現代日本文化学科編、二〇〇五年三月）

「〈恵慶百首〉冬部試注」（『活水日文』第47号、二〇〇五年十二月）

「〈恵慶百首〉恋部試注」（『純真紀要』第46号、二〇〇五年十二月）

なお、用例収集に際し、『新編国歌大観』CD-ROM版 Ver.2とともに、竹田正幸作成の文字列解析器「eCSA」 Ver.1.04を使用した。